

最初の柱はコミュニケーションで、冒頭に述べたラ・デファンス地区に1989年に完成し、同時にパリサミットも開催された新凱旋門「グランダルシユ」は、コンコルド広場、シャンゼリゼ通り、本来の凱旋門とを一直線に結ぶ軸線上に建っています。しかしこの地上には車の姿は全くなく、車は地下に入つて先へ回り込む設計となっています。これは新凱旋門が過去の歴史的延長でもなければ、過去との断絶でもない、過去の知恵を振り起こしながら未来の道へ活かそうとする、過去とのいわば「切れつづき」のうちに転換期の現代が訪れつつあることを示すものです。ガラスと大理石の一辺が110メートルの巨大な二つの建物は最上部で結ばれ、国と国、人と人とのユニバーシティによる交流と共生をめざす現代の舟の姿を象徴しています。

1987年にセーヌ河畔に出た「アラブ世界研究所」は、イスラム文化の発信という異文化に対するパリの寛容さだけでなく、電気ルーバーで一つの窓に70あるイスラム教様が変化するというジャン・ヌーベルの新しい設計によってグランプロジェの最高の建築と評価されました。ここでは人体と建造物、世界と建築界、イスラム世界とキリスト教世界の対話を改裝開館した国立自然史博物館もそれになります。

人気を博しています。第五の柱は歴史です。その代表は前述のオルセー美術館がそうですし、少しおくれてグランプロジェに追加され1994年に改裝開館した国立自然史博物館もそれになります。これらは人体と建造物、世界と建築界、イスラム世界とキリスト教世界の対話をめざす現代の舟の姿を象徴しています。

1996年に世界最大規模の新しい国立図書館トレビック（新BN）が着手建築家ドミニク・ペローにより、書籍を開いて並べたようなデザインで完成し、世界中どこからでも必要な図書や資料を予約した時刻に取り揃えるという画期的なサービスを可能にしています。この国立図書館とそのために新しく開通した地下鉄14号線の駅名にはフランソワ・ミッテランという名が添えられ、グランプロジェに対する国家元首の執念を見る思いがします。

大転換期を迎えた

日本の都市への大きな期待

2003年小泉総理の私的諮問機関として観光立国懇談会が発足し、私はその座長を務めさせていただきました。先進国の中でも最下位に近い日本への観光客数をどう増加させるか、世界から人を招くためにいかに日本の自然や都市をみがきあげるか、をテーマに議論を重ね、観光立国宣言をするとともに多

様な施策を展開することとなりました。この会議は引き続き観光立国懇談会として進められています。この6月に成立した景観三法もその成果のひとつで、それらは戦後の政策の大転換ともいうべきものでしょう。逆説的にいえば今後の都市の魅力の醸成は、従来のようないくつかのまちづくりだけではなく住民本位のまちづくりだけであります。これが駄目ということです。これからは訪れてよい街でなければなりません。それには街がわかりやすい、歩く楽しさがある、おいしい食べ物と飲み物がある、そして美しくかつ心地よい、つまり人の目と口と鼻、そして耳を楽しませるすべての要素を備えることが共通する原則です。訪れてよい街はそのまま住んでよい街ではないでしょうか。パリには一千年の歴史に培わ



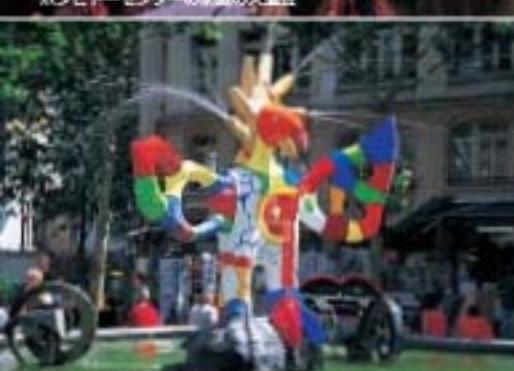
同じくのラ・ヴィレット地区には大規模な科学産業都市が出現し、数々な教育的展示を行っていますが、なかでも直径36メートルの球体映像施設ジエオードが子どもたちをひきつけています。科学技術が第三の柱です。

第四の柱はスポーツです。技術文明の進展によって人間の身体を喜ばせる技術が成熟した今では、自分の手足や頭を動かすことなく、楽しむために身体を動かすことを意味しています。パリ東南のベルシー地区では1983年に、17000席24種の競技に対応できる総合施設「バレ・オムニスポート」が建設され、日本の大相撲のパリ公演も行われています。



活用した世界最大の美術館「グランルーヴル」は、エントランスとなったガラスと鉄のピラミッドによって世界的に賛否の議論を巻き起こし、それによってひろく知られ大成功を収めています。またフランス革命の発端となったバスチーユには1989年に新しいオペラ座が生まれ、パリ東北のラ・ヴィレット地区には新しいコンセルバトワール国立高等音楽院、コンサートホール、音楽博物館を擁する音楽都市が誕生しています。

PARIS



特別寄稿

